



セネガルの子どもたちに教育を！

バオバブの会 ニュースレター

2020年 No.3

(通巻65号)

7月19日発行

非常事態宣言は解除されたものの、首都圏を中心に感染者の増加がとどまらず、早くも第2波の到来が心配されています。かつて経験したことのない状況下で、不安やストレスなどメンタル面の不調も問題になってきましたが、皆様はいかがお過ごしでしょうか。一日も早い収束を願うばかりです。

今号のニュースレターは、バオバブの会の活動終了の延期決定を中心にお届けします。

バオバブの会の活動終了延期について

新型コロナウイルス蔓延により、バオバブの会も多大な影響を受け、今年度予定していたほぼすべての活動の実施が難しい状況になりました。

セネガルでは、4月18日(土)に開催を予定していたサーバシ・チャム小学校の第1回運動会は中止となりました。

国内でも、出展が決定していた今年度前半のイベント、NGOゴスペル広場さんのセネガルウィーク、並びにコンサートが中止となりました。また、秋に予定されていたグローバルフェスタ、あーすフェスタ、よこはま国際フェスタも、今年度は開催されないこととなりました。11月後半から12月初旬に予定しておりました会主催イベント、チャリティーライブ2020も、開催は難しい模様です。

そのため、バオバブの会は今年度末をもって活動終了を予定していましたが、下記の通り、活動終了を1年、延期することになりました。

来年度末の活動終了まで、皆様の一層のご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

1. 活動終了は2021年12月31日とします。
2. 2021年度は年次総会を始め、例年通りの活動を行います。
3. 2022年春に最終総会を開催し、その後、残金分配を含む残務処理を行い、2022年の年末までに、最終レポートを作成・送付します。
4. 役員(運営委員、監査役)は残務処理終了まで現在の体制を継続します。
5. 今年度2020年度後半の活動は、開催されるイベントがあれば参加を検討します。

セネガルの学校の現在の状況

セネガルでは、3月14日、大学までのすべての学校が休校となり、そのまま夏季休暇に入りました。6月末から7月初めに、各種の試験のみ実施されることになりましたが、教員の中から感染者が出たため、すぐに中止となりました。そのため、小学校過程修了試験と中学校進学試験は8月20日、中学校過程修了試験は9月14日(二次試験は10月15日)、バカロレア(大学入学資格取得試験)は8月12日から9月2日までに延期されました。

新学年度開始は通常なら10月初めですが、今年度は11月第1週に予定されています。

エル・ハッジ・マサンバ ディウフ

(訳・文責 水野)

『風が木の葉をゆらすように、死は人をおびやかす』。これはアンゴラのおビンブンドウの人々のことわざです。確かに人は死を恐れます。それは、人間の前にたちふさがるすべての障害の中で、死だけには打ち勝つ希望もなければ、阻むためのいかなる手段もないからです。人類の長い歴史の中で、人々は自らに益するように自然を作り変えてきました。山を拓き海を埋め立て、水のないところには川を作り、大地を田畑や宅地に変える。人間よりも強大な動物たちも手なづけ、水陸空の移動手段を発達させ、宇宙にまでも行くようになりました。多くの病気とも戦い、克服してきた結果、乳幼児の死亡率が下がり、寿命が延びたことで、死さえも遠ざけることができたと言っている人々もいます。しかし、それは死への決定的な勝利ではありません。死は相変わらず人間の傍にあり、年齢も性別も肌の色も社会的な地位も関係なく、人々に襲いかかります。ギニアのマンディングの人々が『死は、誰もが着ることができ、着なければならぬ衣服のようなもの』と言い、モザンビークのワカランガの人々が『死の前に^{ふるい}篩は置かない(死には^{ふるい}篩はいらない)』と言うように。そして、死はいたるところにあり、いつでも傍にやってきます。ですから、レソトのバストの人々は言うのです。『死は我々の衣服の^{ひざ}裏の中にある』と。

死とそれにつながるもの、例えば死に至る病気が現れたとき、人々の反応は、多くの場合、次のような3段階を経ると思います。最初はきわめて本能的な反応として、自分自身を守ろう、自分は生き延びようと考えます。次に、少し冷静になって、事態を観察し、懸命に知恵を働かせようとしします。その後で、自分はひとりではないことを思い出し、セネガルのウォロフの人々が『人は人の最良の治療薬』と言うように、(良かった！ ひとりでは何もできないのだから)と思い、他の人と協力して事態を乗り越える方向に向かいます。

しかし、現在、世界中で猛威を振るい、死につながる病を引き起こす新型コロナウイルスが現れたとき、国のレベルでは、すべてが同じような反応をしたわけではありません。コートジボワールのバンバラの人々の『大きな丸木舟が沈まないということはない』ということわざは、アメリカ合衆国の場合に当てはまるようです。自国の力を過信していたアメリカは、このウイルスは自分たちには関係ないと思っていたのか、対策を講じるまでに時間がかかりました。彼らの油断は、セネガルのウォロフの人々のことわざ、『^{おこたろ}すぐやるべきことを怠ると、ズボンを汚す』のように、10万人以上の死をもたらしたのです。

では、セネガルではどうだったのでしょうか。まず言いたいのは、<大国>と言われている国々は、彼らが<小国>と呼んでいる国々の話には聞く耳をもたないということです。どんな<小国>からでも学ぶことはたくさんあるというのに、残念な傾向です。

セネガルで初めて新型コロナウイルスが検出されたのは、3月3日、外国からやってきた飛行機が着陸した空港の中でした。『治療より予防!』、『家の周りの草を刈るのは火事の前』注1ということわざのように、セネガルは直ちに対応を開始しました。マラリヤやエボラ出血熱のような過去の感染症の経験もありますので、監視も検査も厳重に行われるようになりました。3月14日には、大学までのすべての学校が休校となり、公的なイベントもすべて中止になりました。3月19日、セネガル航空は、すべての国内線と国外線の航行を停止しました。

3月23日には非常事態が宣言され、海・陸・空、すべての国境を閉鎖、夕方の6:00から翌朝6:00までの外出禁止令が公布されました。アーティスト、宗教指導者、スポーツ界などすべての分野の人々が、テレビ、ラジオ、またインターネットを通じて、この感染症の危険に注意をうながし、マスク、手洗い、ソーシャルディスタンスを守る、ステイホームといった予防処置を訴えました。このような迅速な対応は一定の効果をあげたと言えると思います。注2

セネガルの非常事態宣言は、6月30日に解除されました。この時点で感染者数はわずかに減少してはいたのですが、セネガル政府は非常事態を段階的に解除し注3、人々の自主的な感染予防継続に期待し、WITH COLONA、コロナと共に生きる道を選びました。これには二つの理由があります。ひとつは経済の問題です。

セネガルのことわざ、『^{から}空の袋は立てておけない』のように、いつまでも経済を止めておくことはできないからです。二つ目は、人々の不満が高まり、政令に従わないところまでできていたからです。まさに『首を括られた人がもがくのを止めることはできない』です。人々は、ロックダウンによる経済的、社会的、また心理的な影響の大きさを知りました。セネガルのような発展途上にある国々にとって、ロックダウンの影響は非常に厳しいのです。多くの人々が、月々の給料ではなく、日々稼いだお金で生活しています。このようなくその日暮らし>の人々にとって貯蓄は大変な贅沢ですから、日々の経済活動が停止することは、直ちに日々の暮らし、ひいては生命活動の停止につながります。ですから、人々はもうこれ以上耐えられないところまでできていました。食糧を始めとする政府による支援注4はありました。しかし、緊急の課題であるのかかわらず届くのが遅すぎたり、充分でなかったり、地域によってはまったく届かないという状態でした。その上、配布自体に不透明な部分があったことも、人々の怒りを募らせました。

現在、セネガルの人々は、少しずつ生活リズムを取り戻しつつあります。第2波の危険に対する心配はありますが、人々の表情も徐々に明るくなってきました。人々は、毎晩、新型コロナウイルスについての情報を、日々取らなければならない一定量の薬のように、テレビ、ラジオ、そしてインターネットから得ています。

半年前には想像することもなかったこの状況の中で、私は思っています。

コロナ禍が終息し、脅威が遠ざかり始めた途端、人々はもとの習慣を取り戻し、抑えがたい欲望に従って打ち立てた幸福、人々が言うところの<発達した>生活に戻ろうとすることでしょう。『カメレオンは、あの立派な足取りを決してやめない』と、カメルーンのバムーンの人々が言うように。しかし、本当にそれで良いのでしょうか？ 私たちは、行き過ぎた人間中心主義、科学技術の開発、過度の資本主義、経済優先主義などによって、<発達した>生活を手に入れた代わりに、人間も地球上で暮らすたくさんの生物の一員であることを忘れてしまったようです。その結果が、近年著しい気候変動や、新型コロナウイルス感染症のような新たな疫病を引き起こしているのかもしれないと思います。

コロナ禍が終息すれば、すべてがもとに戻り、この感染症による死の恐怖からも遠ざかることができるでしょう。けれども、繰り返しになりますが、人間は死を決定的に避けることはできません。フランスのことわざにも、『壺を何回も井戸に持っていと、しまいには割れる』というのがあります。どのようなものも、使っているうちにいつかは壊れる、ということです。これは壺といった<もの>だけの話ではなく、人間を始めとする生物もまた、生きていくうちに体の中のいろいろな部分が少しずつ消耗し、いつかは死を迎えるわけです。また、タンザニアにはこのようなことわざがあります。『水牛の狩人は水牛に殺されて死に、海辺に住む人々は水の中で

死ぬ』。私たちにとって死は特別なものではなく、日々の活動の中で自然に死に向かっていく、ということです。ですから、もし心静かに死に向かっていくための最良の方法があるとしたら、それは真に人間らしく生きることではないかと思います。コロナ禍をひとつの機会として、私たち自身の生き方、また社会の行き方について、もう一度考え直す必要があるのではないのでしょうか。

注1：セネガルには、火災の起こりやすい時期（乾季）になると、万が一の場合に備えて、家のまわりの草をぐるりと刈り取るという習慣があります。

注2：3月3日から現在（6月5日）までのセネガルの新型コロナウイルス感染状況は下記の通りです。

陽性 7,425人 治癒 4,896人 死者 133人 治療中 2,396人（うち48人が重症）

注3：この段階で空路は開きましたが、陸の国境は閉鎖のままでした。セネガルは、マリ、モーリタニア、ギニア、ギニアビサウの4か国と国境を接し、また、ガンビアを囲んでいますので、陸上の国境対策が大変に重要です。

注4：セネガル政府は、新型コロナウイルス対策として、1兆Fcfa（約2,000億円）を拠出しました。このお金は、困窮世帯への食糧支援の他、運営が困難な状況になっている中小の事業者、外国で生活しているセネガル人コロナ感染者の中で、滞在国の制度上、支援を受けられない人に対する支援に使われることになりました。

バ オ バ ブ の 会 代表 エル・ハッジ・マサンバ ディウフ

〒240-0052 神奈川県横浜市保土ヶ谷区西谷町993 - 35 TEL&FAX 045 - 373 - 0059

寄付振込先：ゆうちょ銀行振替口座 00200=1 45215

三菱UFJ銀行八重洲通り支店普通口座no. 1523673

★HP：<http://the-baobab.org>

★Mail：info.the.baobab.assoc@gmail.com HP内の「お問い合わせはこちら」からご連絡いただけます。

★FBページ名：バオバブの会The Baobab Association URL：

<http://www.facebook.com/the.baobab.association>